

一般社団法人 **中央酪農会議** <http://www.dairy.co.jp/>

平成26年度生乳需要基盤強化対策事業 独立行政法人農畜産業振興機構 後援

〒101-0044 東京都千代田区鍛冶町2-6-1 堀内ビルディング4階 TEL: 03-6688-9841 FAX: 03-6681-5295

## 値上げの春、酪農にも波及：乳価値上げも、模索続く日本酪農

今年に入って、多くの食品の販売価格が値上がりしています。背景にあるのは、円安と原料価格などの高騰。トウモロコシや乾牧草などの輸入飼料を使用する酪農家においても、影響は深刻です。酪農家が生産する生乳の取引価格(=乳価)についても、4月から値上げせざるを得ない状況です。また、厳しい経営環境が続くことで酪農家の減少が続いており、畜産業の中でも新規参入が難しいとされる酪農においては、担い手の確保が課題になっています。

このような中であっても、日本の基礎的な食料である牛乳乳製品の安定供給のため、課題を乗り越えようと努力を重ねている酪農家も多くいます。今回は、乳価値上げの背景を説明するとともに、日本の酪農を次世代の担い手に引き継ぐための、新潟県新潟市の牧場の取り組みについてご紹介します。

### 2015年4月、乳価の改定を実施

#### 主要な食品価格が相次ぎ値上げ

食用油に即席麺、そして冷凍食品にアルコール。家庭料理に欠かせない食材から嗜好品まで、さまざまな食品の価格が相次いで値上げされています。

その中でも目立つのが、パスタや即席麺といった、穀物を原料とした食品で、主要メーカー各社が値上げを表明しています。

表1 (2015年に値上げする主な食品)

- 食用油
- パスタ/カップ麺/即席麺
- 魚介缶詰/魚肉練り製品
- 輸入ワイン/ウイスキー/紅茶
- 冷凍食品
- カレールー

食品の価格上昇の背景には、世界的な穀物価格の高騰があります。バイオエタノール向けのトウモロコシ需要の高まりや、新興国での穀物需要の増加などから、穀物価格の水準が90年代に比べると大きく上がっており、穀物を原材料とする食品のコスト高を招いています。

それに加え、昨秋以降急激に進んだ円安が、原材料のコスト増を後押しし、製品価格に転嫁せざるを得ない状況になっているのです。

また、光熱動力費や流通費、包装資材価

格の上昇などもあり、酪農業界だけでなく、食品産業全体にとって、値上げがやむを得ない状況となっています。

#### 穀物価格上昇×円安の影響を受け、コスト高に陥る酪農経営

穀物価格の高騰は、乳牛を育てるのに欠かせない飼料の価格にも直接反映されます。

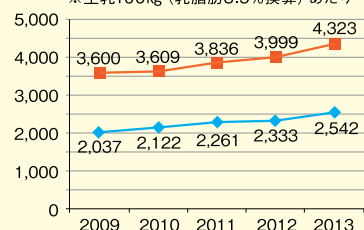
日本の酪農では、飼料の多くを輸入に頼っていますが、その価格は近年上昇を続けています。

これにより、牛乳や乳製品の原料となる生乳の生産にかかる「流通飼料費」は過去4年連続で増加。もとより酪農をめぐる経営環境は厳しいうえに、日々乳牛に与える飼料費のコスト高は、酪農家にとって大きな打撃となっています。

これに対し、生産性の向上、経営基盤強化などの努力も積極的に行われていますが、個々の生産者レベルで大きな経済の波を受け、負担を続けるには限界があります。

図1 生乳生産にかかる流通飼料費

※生乳100kg(乳脂肪3.5%換算)あたり



農林水産省「最近の牛乳乳製品をめぐる情勢について」(2015年2月)より作成

#### 生乳の生産基盤を守るため、乳価の改定を実施

そこで、前述の背景を踏まえ、酪農家の生産する生乳を販売する指定生乳生産者団体と乳業メーカーが交渉した結果、大手乳業者などは、2015年4月から、牛乳やヨーグルトなどに使用される生乳の価格について1kgあたり3円の値上げ、その他の乳製品に使用される生乳でも値上げが決まりました。これに伴い、大手乳業メーカー3社は、乳価の値上げに加え、包装資材価格や物流費の上昇など自社のコスト増を踏まえ、既に、4月から(一部商品は3月から)牛乳・乳製品の出荷価格を改定することを発表。牛乳では、2~5%程度の値上げとなります。

これまで、生産現場から消費までの様々な関係者の努力により、安全安心な牛乳・乳製品を安定的に供給してきましたが、酪農の生産基盤の弱体化をはじめとする様々な要因により、その安定供給が脅かされています。

今後も日本の基礎的な食料である牛乳・乳製品の安定供給を続けるためには、日本の酪農や牛乳、国産の乳製品の重要性へのご理解、酪農家が安定的に生乳供給できる適正な乳価へのご理解とともに、実質的なコストに見合った適正な価格で牛乳・乳製品を販売・購入していただくことが必要不可欠なのです。

# 牧場を支えるスタッフのほとんどは20代。 「労働ではなく仕事をする」ことを掲げ、 酪農の魅力は次世代に継承

新潟県新潟市 Moimoiファーム 堤 富士人氏

## 若手スタッフとともに働き、 次世代に酪農をつなぐ

日本を代表するコメどころ、新潟。広々とした田園地帯の一角に3棟の牛舎を持ち、95頭のホルスタインを飼育している牧場が、農業生産法人の「株式会社 Moimoiファーム」です。

社長の堤富士人さん(54歳)と、ともに働くスタッフは現在4名。その顔触れは、農業大学校の卒業生から、まったくの未経験者までさまざまですが、20代から30代にかけてのエネルギーにあふれた人材ばかりです。

日本の酪農の担い手が年々減少し、特に若手の就労者が不足している中、この牧場では若手のスタッフの雇用に成功し、さらにその中から次期社長に就任する人が決まっています。

今回は、社長の堤さんに、積極的に受け入れている若手が高いモチベーションを持って活躍できる酪農経営のあり方について、お話を聞きました。

日本の酪農は家族経営のスタイルが多

く、堤さんも畜産の大学を卒業して20代で家業の酪農を継承したときは、ご両親も一緒に働いていました。

しかし、酪農経営の合理化を進める中で、10数年前にご両親は引退しました。

そこで、人材を確保するため、これまで地域の酪農関係者に声をかけるなどして人材を募集。過去に10人ほどの若者を雇用してきました。

その半数は、地元にある新潟県農業大学校からの紹介。畜産科の卒業生や酪農に興味を持つ若者を受け入れ、一から指導を行ってきました。



ホルスタイン柄の建物の外装はスタッフの手でペイントされています

高度な衛生管理を行っていることから、新潟県畜産協会から「クリーンミルク生産農場」の認定も受けています。

## 規模拡大により 経営体制を整備

堤さんの牧場には、規模を拡大するいくつもの転機がありました。

まず、隣接する酪農家が廃業したことで、牛舎を借りたり、買い取ったりすることができたため、規模を拡大。増頭により生乳生産量が増えることで収入が増え、安定的に人を雇用できるようになりました。

さらに2年前に経営基盤を強化するために、牧場の法人化を行いました。ともに働くスタッフと共同出資する形をとり、皆でつくりあげていく体制ができました。

法人化により活用しやすくなった補助事業の助成を受け、新潟県で初めてとなる搾乳ロボットを導入。作業の合理化により100頭近くにまで飼育頭数を増やすことができました。

## 乳牛を健康に育て 安全安心な生乳を生産

Moimoiファームの生産技術は高く、経産牛1頭当たりの乳量は県の目標(9.0トン)を上回る9.5トンです。しかし、この結果にも満足せず、コンスタントに10トン以上生産することを目指しています。

乳量が多いということは、毎日の世話が行き届き、乳牛が健康であることの証拠です。一頭一頭の体調を人の目と手で確かめ、乳房炎などの病気の予兆を見逃さないように努めていることがうかがえます。



3つの牛舎で95頭の乳牛を飼育しています



Moimoiファーム 社長 堤富士人さん

## ■法人化により経営基盤を強化

法人化は、事業継承がしやすくなるというメリットもあります。

元来、家族に牧場を引き継ごうという考えを持っていなかった堤さんは、20代の若手のスタッフの中から次期社長を指名しています。経営会議では、これまで堤さんが身につけてきた酪農経営の技術や情報を後継者に伝えていきます。

## ■経営情報もスタッフと共有化

堤さんは、働く人一人ひとりに自主的に仕事に向かって欲しいと考えています。

そこで、今月の売上げや飼料代、手元残金はいくらかといった会社の経営情報をスタッフにも共有し、それらの情報を踏まえて、日々の業務の中で自分がすべきことを具体的にイメージしてもらうようにしています。

次期社長となる予定の<sup>あぜはら</sup>畔原さん(26歳)も、「収支を知ること、例えば、来月はもっと乳量を向上させたい、頑張ろうという気持ちになる」と話します。



次期社長となる予定の畔原健太さんも交え、経営会議を開催しています

## ■勉強会を開催し、若手スタッフの人間力と自主性を育む

Moimoiファームでは、1カ月に2回のペースで勉強会を開催しています。

勉強会のテーマは堤さんだけでなく、スタッフが提案することもあります。その内容は自由で、最近の政治情勢から、「地



各自が考えを述べ合う勉強会では、多様なテーマが扱われます

球外生命体は存在するか?”といったユニークなテーマまで様々です。ちなみに酪農をテーマにしたものは年に数回しかないとのこと。

忙しい業務の合間であっても、若手に「人間力を高めてもらいたい」と堤さんは話します。

勉強会は、スタッフ間のコミュニケーションの場にもなっています。意見を述べ合うことで、それぞれの考え方や個性を知ることができ、モチベーションや雰囲気作りにつながると参加者も話します。

## ■リフレッシュのための長期休暇

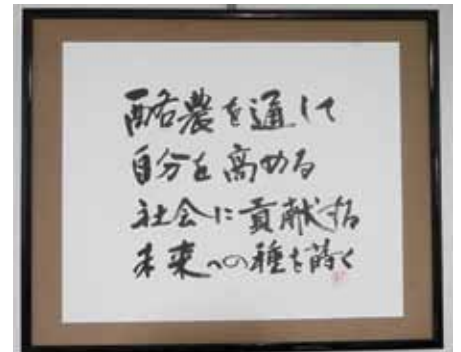
スタッフのモチベーションアップにつながるもう一つのポイントが、長期休暇制度です。

乳牛の世話は休みなく続き、まとまった休暇を取ることが難しいとされますが、Moimoiファームでは1年間のうちで連続して7~10日間の休暇を取れる制度を設けています。

この制度を活用して、若手スタッフは世界の牧場を視察したり、ボランティア活動をしたりと、思い思いに過ごすことができます。

## ■伝えたいのは「労働ではなく、仕事をする事」

「Moimoiファーム」という名前は、フィンランドを旅行したスタッフのアイデアから採用されたものです。ちなみに、moiとは、フィンランド語で「やあ!」「よう!」という挨拶の言葉を繋げた言葉で、牛の鳴き声の「モーモー」に似ていることが採用の決め手だったとのこと。このように従業員



皆で考えて作り上げた企業理念を掲示しています

ら募集してとりまとめたという、牧場の企業理念からも明らかです。

Moimoiファームの企業理念は、「酪農を通して自分を高める、社会に貢献する、未来への種を蒔く」。また、毎年の年初にスタッフ1人1人が1年の抱負を色紙に書くこともMoimoiファームの習慣となっています。



若い女性スタッフも、自ら判断して行動します

従業員の自主性や提案を重んじる取り組みをしている理由を堤社長に何うと、「“労働”ではなく、“仕事”をしてもらいたいと考えているから」という答えが返ってきました。

「指示をもらって実行するだけでは単なる労働で、機械でも代替できます。作業の意味や理由を自分で考えて手を動かすことで、労働がやりがいのある仕事に変わっていく」と堤さんは考えています。



搾乳をしながら、一頭一頭の健康状態に目を配る

## ■地域との交流にも積極参加

酪農経営をする上では、地域とのつながりを保つことも大切です。堤さんの牧場では規模の拡大とともに、たい肥の量も増加。それを近隣農家に有償提供して地域で循環させています。

そのほか、酪農の振興に寄与する催しには、可能な限り参加しているそうです。その一つが、小学校などでの出張授業です。堤さんや牧場スタッフが学校などに赴き講師として子供たちに酪農の仕事を伝え、食育の推進に協力しています。また、逆に牧場に、子どもたちを招き入れ、牛を触らせたりすることもあり、「子供や地域の人に酪農に親んでもらえると嬉しいです」と堤さんは語ります。

## ■力仕事でも大丈夫！ 牧場で活躍する女性たち

現在働く4名のスタッフのうち、2名は女性。体力が求められるこの仕事で、どのような業務を受け持っているのでしょうか。

農業大学校を卒業して2年目の佐藤彩花さんは、勤めはじめた頃は体力に不安があったそうです。清掃から始め、徐々に給餌、搾乳へと仕事を広げていったのだとか。時間とともに慣れていき、女性の体力でも問題がないと思ったそうです。仕事を始めて4カ月目の小崎多恵子さんの今の目標は、搾乳がうまくなること。毎日の牛の世話



従業員の半数は女性

の成果である生乳を取りだす仕事にやりがいを感じるそうです。

## ■飼料費高騰が経営に影響

堤さんとスタッフの努力により、牧場経営は順調ですが、近年の飼料費の高騰は、経営に大きな影響を与えました。

Moimoiファームで使う飼料のすべては輸入品で、生産コストの6割を占めていますが、この1年だけでも価格が1～1.5割ほど値上がりになったそうです。

生乳の取引価格がこの4月から値上がりすることで経営の厳しさは緩和されますが、業界全体から見ると、生産コストが高く経営が不安定な状況は依然続いています。

## ■「やめる×やりたい」を マッチングする 仕組みが必要

30年以上にわたって酪農に携わる堤さん。「農業は国の礎で、牛乳という基礎的な食料を安くおいしく安定的に提供する、素晴らしい仕事。それに貢献しているということがやりがいです」と話します。

しかし、厳しい経営環境の下、10年前に400軒以上あった新潟県の酪農家は、今はおよそ210数件にまで減少しているそうです。「酪農の存続は、切実な問題」と堤さんは危機感を持っています。

日本の多くの牧場が家族経営ですが、後継者不足による廃業が多く、家族が病気で倒れてしまうと、そのまま廃業に繋がるケースがあると言います。一方、酪農に夢を持ち、新規就農を望む人もいますが、多額の資金が必要であることから断念するケースもあるそうです。酪農の存続のためには、「就農希望者と廃業予定者をつないで、就農希望者に金銭面の不安を与えずに、廃業予定者から経営を引き継ぐマッチングの仕組みと、大きすぎるコストを緩和するための行政のバックアップが不可欠」と堤さんは言います。

## ■酪農の仕事を、 誇りを胸に継承

Moimoiファームの次期社長に任命された畔原さんにも話を聞きました。



酪農家に育ち、牛をはじめとする動物が身近な存在だったことから、ごく自然に酪農の道を志望したという畔原さん。

畔原さんのお父さんと堤さんが知り合いだったことから、Moimoiファームで修行し、本当は数年後に実家の牧場を引き継ぐ予定でしたが、その前に実家は廃業してしまいました。堤社長から「牧場を任せたい」と言われたときには、「責任は重いが、自分でよければぜひチャレンジしたい」と感じたそうです。

畔原さんは、「牛の世話は生活の一部であり、酪農以外の仕事は考えられない」と言い切ります。「酪農は、人の口に入る食料を自分の手でつくる、誇りのある仕事」と、力強く語ってくれました。



### 【Moimoiファーム】

所在地:新潟県新潟市南区味方

社長:堤 富士人さん

飼育頭数:95頭